

アディウム帝国召喚

汁だく茶釜

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

SCP世界におけるサーキック・カルトの源流とも言えるアディウム帝国は、メカニトの軍勢に敗れる寸前、異世界へと召喚された。

これは異世界でサーキック勢が大暴れするおはなし。

??サーキックの設定に関しては多分の個人解釈が含まれます。

SCP Foundationはクリエイティブ・コモンズ表示
継承3.0ライセンス作品です (CC-BY-SA3.0)

<http://creativecommons.org/licenses/by-sa/3.0/deed.ja>

目次

アデイウム帝国異世界へ	1
動乱	3
ギムの悲劇	6
ロデニウス沖大海戦	9
ロデニウス沖大海戦2	12
エルフの村	14
ロウリア王国の終焉	17
ネオ・サーカイト召喚	20
ネオ・サーカイト召喚2	24
ぬ	27

アデイウム帝国異世界へ

クワトワネ公国 政治部会

「報告します!!?」

国の代表者が集まるこの会議で、外交部の若手幹部が、息を切らして入り込んでくる。

通常では考えられない。明らかに緊急時だった。

「何事か!」

外務郷が声を張り上げる。

若手幹部が報告し始める。要約すると――。

クワ・トイネ公国の北側海上に、100m近い大きさの肉で構成された超大型船が現れた。

検問を行ったところ、アデイウム帝国という国の大使がおり、敵対の意思がないことを伝えてきた。

検査を行ったところ、下記の項目が判明した。

○ アデイウム帝国は、突如としてこの世界に転移してきた。

○ 同国はヤルダバオートと呼ばれる神格の力を断片的に取り込み、国力にしている、しかし、この神格を信仰している訳では無い。

哨戒活動の一環として、貴国に進入しており、その際領海を侵犯したことについては、深く謝罪する。

○ クワ・トイネ公国と会談を行いたい。

突拍子もない話、政治部会の誰もが、信じられない思いでいた。

国ごと転移など、神話に登場する話で、現実にはありえない事だ。しかしまずは特使と会う事にした。

中央暦1639年3月22日午前――

アデイウム帝国が転移してから、2ヶ月が経とうとしていた。

彼らと国交を結んでから2ヶ月、クワ・トイネ公国は、今までの歴史上最も変化した2ヶ月であった。

2ヶ月前、アデイウム帝国はクワ・トイネ公国と、クイラ王国両方に同時に接触し、双方と国交を結んだ。

アデイウム帝国からの、家畜の買い付け量は異常な程までだったが、家畜を育てる肥料が多くあるクワ・トイネ公国は、アデイウム帝国からの受注に応える事が出来た。どうやら、ハルコストと呼ばれる生命体を創造するのに必要らしい。

一方、アデイウム帝国はこれらをもろう変わりに、ハルコストや異常な魔術を輸出してきた。

人間の限界を超えた寿命の獲得、疾病からの保護、回復能力の底上げができる特殊な寄生生命体である「アクロス」と呼ばれるもの。また上記に出ていたハルコストと呼ばれるものだ、これは建築材料や兵力、労働力などに活用されてるそう。しかもその労働効率は人間の比にはならず、兵力として活用する場合も、人間の兵士数十人分はあるだろう。

「すごいものだな、アデイウム帝国は……。特にハルコストと呼ばれるものは、あの国の強さの根幹なのだろうな」

クワ・トイネ公国首相カナタは、秘書に語りかける。

「はっ。しかし、彼らが同盟を結んでくれて助かりました。もしあの力が、我が国に向けられたらと考えるとぞつとします」

「そうだな、アデイウム帝国はロウリア王国に攻め入るらしいからな、我が国の悩みが一つ減ると言うものだ」

カナタはうつすらとした笑みを浮かべた。

動乱

ロウリア王国 王都 ジン・ハーク ハーク城 御前会議

薄暗い部屋の中、王の御前でこの国の行く末を決める会議が行われていた。

「ロウリア王、準備はすべて整いました」

白銀の鎧に身を包み、黒髭を生やした30代くらいの男が王に動き、報告する。

彼の名は、将軍、パタジン

「2国を同時に敵に回して、勝てるか？」

34代ロウリア王国、大王、ハーク・ロウリア34世はその男に尋ねる。

「二国は、農民の集まりであり、もう一国は不毛の地に住まう者、どちらも亜人比率が多い国などに、負けることはありません。」

「宰相よ、1ヶ月ほど前接触してきたアディウム帝国の情報はありますか」

アディウム帝国はロウリア王国にも接触してきたが、事前にクワ・トイネ公国と、クイラ王国と国交を結んでいたため、敵性勢力と判断され、ロウリアには門前払いを受けていた。

「奴らは我が部隊のワイバーンを見て、初めて見たと驚いています。竜騎士の存在しない蛮族の国と思われれます。情報はあまりありませんが」

ワイバーンの無い軍隊は、ワイバーンの火力支援が受けられない分、弱い。

空爆だけで、騎士団は壊滅しないが、常に火炎弾の驚異にさらされ続けるため、精神力が持たない。

「そうか……。しかし、ついにこのロデニウス大陸が統一され、忌々しい亜人どもが、根絶やしにされると思うと、私は嬉しいぞ」

「大王様、統一の暁には、あの約束も、お忘れ無く、クツクツク」
真つ黒のローブをかぶった男が王に向かってささやく。気持ちの

悪い声だ。

「解っておるわ!!」

王は、怒気をはらんだ声で、言い返す。

(ちっ、3大文明圏外の蛮地と思つてバカにしおつて。ロデニウスを統一したら、フィルアデス大陸にも攻め込んでやるわ)

アデイウム帝国、首都――アデイトウム。

「ロウリア王国と戦闘が始まった様ですね……」

クラヴァガル・サアルンは自らの主に説明する。

彼女率いる偵察隊――もとい暗殺部隊はクワトイネとロウリア国境にて、ロウリア王国の兵力が集結しており、戦闘が近いと判断した。

「確か、クワトイネ公国から援軍を送る様に要請が来ていたな」

崇高なるカルキスト・イオンはそう呟いた。

黒衣の衣装に身を包み、長杖を持った彼は中性的な顔立ちの人物だった。

「結局のところ援軍は送られるのですか？」

「勿論そのつもりだ、この世界で私たちの力が何処まで通用するか試したいしな」

「忌まわしきメカニト共がないこの世界では私達は無敵でしょう」

しかし、サアルンの発言に対してイオンはそうでもない、と言いつつ。

「私達は鉄を精製する技術すら無いのだ……この世界では鉄は一般的だ、前の世界ならメカニトとヒツタイト王国のみの技術だった

が

「おっしゃる通り、油断はできませんね」

「兎も角、クワ・トイネに援軍を送ることは決定だ、宜しく頼む」

「はっ、今すぐ軍の招集を……」

サアルンはそう言うと、イオンの前から立ち去った。

ギムの悲劇

中央歴1639年4月12日早朝
国境から20kmの町、ギム

そこでは、大量のワイバーンの対地支援により、クワトイネの騎士団は大打撃を受けていた。

すでに戦力の3分の1が失われている。そこへ、ロウリア先遣隊歩兵、重装歩兵合わせて2万5千がなだれ込む。

30分で、クワトイネ騎士団は壊滅、動く者はいなくなった。ギムは、すでにロウリア先遣隊により包囲されている。

「ふっ、弱い。所詮はこんなものか……これより、ギムへと攻め入る、住民は好きに殺せ」

ロウリア先遣隊副将アデムは、嘲笑を浮かべた。アデムは軍を進軍される様に部下に命令した。

しかし動き出した軍勢は直ぐに止まる事になった。

「アデム様、大変です!!?アデイウム帝国軍がギムを飲み込んで正面から向かってきています!!?」

一人の部下が、顔を青ざめながらアデムに必死に伝えてきた。

「アデイウム帝国はワイバーンすら無い蛮族の国だろう? それにギムを飲み込んだとはどういう意味だ?」

「そのままの意味です!!? ギムの町全体が異形の化け物に群れに飲み込まれたんです!!? しかも、明らかにその数が増ええて……」

アデムは彼の言っている事は理解できなかったが、彼の必死さから

して嘘では無いのだろう。

「わかった、ならば魔獣を投下しよう」

「魔獣でどうにかなる相手ではありません、今すぐ撤退を!!?」

アデムは暫くして彼の言っていたことを完全に理解することになった。

その頃、ロウリア先遣隊の先頭では地獄が形成されていた。

「こ、こつちに来るな、化け物!!?」

「逃げろ!!?」

「た、助けてくれ!!?」

体長4・5mの目のない巨人がまたひとり、ロウリア兵を持ち上げ食い殺す。

身体全身をキチン質の鎧に覆われた人型の怪物にロウリア兵は切り刻まれていく。

ゼリー状の肉の塊が、ロウリア兵を飲み込んで、限度無く大きくなっていく。

地面から無数の触手が飛び出し、ロウリア兵を地下深くに引き摺り込んでいく。

ロウリア兵を襲っていた化け物達の、大半は元ギムの住民達だ。

このギムの住民だけの犠牲があれば、ロウリア王国は赤子の手を捻る様に滅ぼせるだろう。

少なくとも、この光景を後方で見ていたカルキスト・ザアラはそう思った。

彼女は自分の耳をふと触ってみる。

人の耳と比べて細長い耳は、自分にあの憎むべきダエーワの血が流

れているのだと思った。

オジルモークとクラヴィガルを両親に持つ彼女の實力は他のカルキストとは一線を隔てている。それどころかクラヴィガルに匹敵しているまであるくらいだ。

カルキスト・ザアラは、ロウリア兵に群がるハルコストの群れを見ていると、段々と戦列が崩れ、敗走を始めた。

彼女が片腕を宙に掲げると、肉の壁がロウリア軍の周辺を囲み、ロウリア兵は退路を絶たれる。

そこからは一方的な虐殺だった。

本来、虐殺する予定だったギムの住民の成れの果て達に食い殺されていく。ワイバーンも対地攻撃を行うが焼け石に水でしかない。その光景はこの地獄を創り出したカルキスト・ザアラですら嫌悪感を覚える程だ。

アデイウム帝国—————。

その国の軍勢は、攻めるところ必ず勝てるから戦術は要らない。更には死体を戦力にできるので補給すら要らない。

つまるところ人間の軍ではなし得ない無敵の軍勢。異形の神と契約を交わし、手に入れた反逆の力。世界の全てを敵に回してまで、抑え込めなかった忌み嫌われし帝国が異世界で初めて牙を向いた瞬間だった。

ロデニウス沖大海戦

ギムでロウリア先遣隊が、殲滅されたと同時刻頃。

ついに、ロウリア王国が、4000隻以上の大艦隊を出向させたという情報が伝えられ、マイハーク港に基地を置く、クワトイネ公国海軍は艦船を集結させていた。

各艦は、帆をたたみ、港に集結し、きたるべき決戦の準備をしていた。

艦船の数はおよそ50隻。

「壮観な風景だな」

提督パンカールは、海を眺めながら、ささやく。

「提督、海軍本部から、魔伝が届いています」

側近であり、若き幹部、ブルーアイが報告する。

「読め」

「アディウム帝国の軍船8隻と巨像が援軍として、マイハーク沖合いに到着する。彼らは、我が軍より先にロウリア艦隊に攻撃を行うため、観戦武官1名を彼らの旗艦に搭乗させるように指令する

……との事です」

「何!? たったの8隻だど!!?! 800隻か80隻の間違いではないのか?」

それに巨像とはなんだ☒」

「間違いではありません、巨像は恐らく何らかの兵器かと」

「やる気はあるのか、彼らは……。しかも観戦武官だど? 8隻しか来ないなら、観戦武官に死ねと言っているようなものではないか!」

「……私が行きます」

ブルーアイが発言する。

「しかし……。」

「私は剣術ではN01です。一番生存率が高いのは私です。それに、あの化け物達を操るアディウム帝国の事です。もしかしたら勝算があるのかもしれない」

「すまない……。たのんだ」

「はっっっ！」

その日の夕刻。

ブルーアイは、目を疑っていた。

その船は、彼の常識からすればとてつもなく大きかった。アディウム帝国との接触の際に、100mクラスの船を臨検したという話を聞いていたが、嘘をついていると思っていた。

彼が見ている船は、肉と骨に覆われており、遠くの沖合いに停泊しているにも関わらず、かなり大きかった。

それ以上に驚く事に、真鍮らしき材質の巨大な鎧が肉造船の後について来ていた。海面から身体の半分以上が出ており、推測するに、これも100m近い大きさがあるのだろうか

(いったいなんだ！この大きさは。それに肉で出来ているのか？ 兎も角、これだけ大きければ乗組員が多いのだろう、ならば移乗攻撃は有利なのだろうな……。それにあの馬鹿でかい鎧の様なものはなんだ？ あれが巨像と言うやつなのだろうか)

ブルーアイは唾然としながらも、船の中に入っていった。

彼はやがて艦長と思わしき人物に出会う。

「この隊を率いている、カルキスト・トウundasです」

「クワトイネ公国第二海軍観戦武官のブルーアイです。このたびは、援軍感謝いたします」

「さっそくですが我々は、明日の朝出航し、巨像により攻撃を行います」

トウundasは巨像を使う事に疑問を感じていた。

この真鍮の悪魔は、アディトウムの大部分を焼き払ったメカニト共の醜悪な機械のうちの一体だ。しかし、アディウム帝国がこの世界に

転移した事により、孤立した巨像群は瞬く間に制圧・鹵獲したが、クラヴィガル・ナドックスの命令により、戦力として再利用する事になった。

上が決めたとは言え、多くの同胞を焼き払ってきたこれを使うのは嫌悪感があった。

「とりあえず、それまではゆっくりしててください」

トウundasはひとまず、心を落ち着かせると驚愕していたブルーアイに話しかけた。

ロデニウス沖大海戦2

ロデニウス沖大海戦2

ロウリア王国東方討伐海軍 海将 シャークン

「いい景色だ。美しい」

大海原を美しい帆船が風をいっぱい受け、進む。その数4400隻がマイハークに向かっていた。

パーパルディア王国からの軍事援助を経て、ようやく完成した大艦隊。これだけの大艦隊を防ぐ手立ては、ロデニウス大陸には無い。

いや、もしかしたら、パーパルディア王国でさえ制圧できそうな気がする。

彼は、一瞬出てきた野心の炎を理性で打ち消す。第3文明圏の列強国に挑むのは、やはり危険が大きい。

彼は東の海を見据えた……。

黄色に光り輝く真鍮の巨人が迫って来ているのを確認する。

見たことの無い物体が、海を切り分けて迫ってくるのは異様な光景であり、わずかに恐怖の心が芽生える。

こちらは4400隻、あちらは見える範囲で一体のみ、シャークンは攻撃を命令した。

船から一斉に、火矢が、巨像を襲う。

しかし、金属製のそれにはダメージが通ることはない。

続けて、バリスタから槍の様な弓矢が放たれるが、こちらも巨像の装甲の表面を傷つけるばかりで、大したダメージにはならない。

巨象が右腕を振り上げると、腕の先に搭載されたノズルから火が噴き出す。

幾千ものハルコストーパー。果ては幾数のカルキストでさえ焼き払ってきたギリシアの火がロウリアの大艦隊を襲う。

巨像を取り囲んでいた、200隻もの軍船は、瞬く間に燃え上がり、

海の中へと沈んでいく。

次に巨像は左腕を掲げた。

財団の研究ではそのヒューム値は70、存在するだけで、辺りの空間を歪める現実改変兵器は4200隻の大艦隊に向かって放出された。

その攻撃を避けれる筈も無く、現実改変砲は直撃した。

ロウリア王国東方討伐海軍の半数にあたる2000隻が異世界へと吹き飛ばされる。

辺りの海も同様に転移した影響で、海水が消え失せ、空いた空間を埋める様に海水が流れ込んでいく。

「悍ましい…… 我らの同胞もああやって消されたんだろうな」

肉造船の上でブルーアイと共に、その光景を見ていたトウダスは虚無に呟いた。

ブルーアイもその余りにも現実離れた光景に、驚愕していた。目の前でロウリア艦隊の半数が突然として消えたのだ、無理も無い。

やがて、援軍として、ロウリア王国軍のワイバーンが350騎が到着するが、ワイバーンに「アクロス」を搭載した改造ワイバーン100騎により、壊滅させる。

残った2000隻は撤退を始めたが、あらかじめ、周辺に配置していた水生ハルコストにより、じわじわと被害を受けていく事になる。

こうして、ロデニウス沖大海戦はアデイウム帝国の完勝で終わった。

エルフの村

ギムの東へ約20km、ある名も無き小さなエルフの村、外界からの交流は少なく、ギムでの出来事の報が来るのが遅れた。

にわかには信じがたい話ではあるが、ギムの住民達が異形の化け物と化して、ロウリア軍を飲み込んだらしい。

彼らはむやみに動くのは得策では無いと判断し、村に留まっていた。

その村に、ロウリア軍の残党、100人がやってきた。

彼らはギムでの戦いの生き残りだ。しかし誰もが発狂状態で、まともな会話が成立する様な状況じゃ無い。

「この村の住人を生贄として捧げます!!? あはははああ!!?」

「この村の人間からしたら俺ら助かるんだ!!?」

「あ? ああ...」

彼らは、村人たちを殺そうと突っ込んでいった。

何故自分達だけが、こんな目に遭わなければいけないのだと。微かに残った理性が怒りを増幅させた。

村人たちは元から警戒していたのもあって、速やかに避難できたが逃げ遅れた50人ほどが切り殺された。

村人たちは次々にロウリア兵に捕まり、殺されていく。彼らは狂氣的な高揚に包まれた。

村人たちはもうダメかー！ー！そう思った時だった。

地面から突き破って姿を現した触手に身体を掴まれ、ロウリア兵達は地面に引きずり込まれていく。

100人ほどのロウリア兵は瞬く間に全滅した。

「これで最後だと良いんだけど……」

カルキスト・ザアラはそう呟いた。

ギムでの戦いで、殺しきれなかった集団はこれで最後の筈である。ひとりひとり、ばらばらに逃げ出した者は相当量いるだろうが、そこまではカバーは仕切れない。

ザアラは村の家屋へと目を向ける。

窓の隙間から、此方を怯えた表情でじっと見ているエルフ達の姿があった。彼らの瞳には恐怖の色が宿っていたが、まあ仕方が無い。

エルフと言う種族は、ダエーワと同じ様な見た目をしている。ザアラはダエーワの血を4分の3を引いている訳で、外見は彼らとかなり似通っていた。

しかし、エルフはダエーバイト由来の魔術や植物操作術が使える訳でも無いらしい。見た目は似ているが根本的に種族としては別の存在なのだろう。

村人達はザアラが同族だと勘違いしたのか、少し恐怖が薄まるのを感じた。

やがて、暫くすると村長らしき人物が此方に歩み寄ってきた。

「助けて頂きありがとうございます……それで何が対価でしょうか？ やはり生贄ですか？」

村長はかなり怯えた様子だった。

彼女の権能……サーキックの異常能力を見れば、そうなるのも理解はできる。

とは言え、対価としては求めるものは何も無い。自分がギムの住民をハルコストに変えた事実が仮に広まっていれば、そう言う考えにもなるだろう。

「特に私が貴方達に求める事はありません。私はただ任務できただけです」

村長は何処か安堵した表情を浮かべた。とは言えザアラを完全に信用した様子でも無かった。

「私はこれで帰りますので、そう怯えなさらないでください」

ザアラはそう言い残し、その場から去ろうとする。

「少しお待ちください！ 助けてくださった恩人を礼もせず返すわけには行きません」

村長はそう言ってザアラを引き止めた。

そうして、後にエルフの村とアディウム帝国は交友を深める事のきっかけとなった。

ロウリア王国の終焉

数日後――。

ロウリア王国軍は迫り来る肉の軍勢により、壊滅的な被害を受けていた。

更に各地で未知の伝染病が蔓延し、多くの人間が死んでいるらしい。その症状も様々で口から血を吐いたり、皮膚が黒ずんで死んでいったり多岐にわたる。

そう言った者たちへの差別も深刻であり、国内に大きな亀裂を産んでいた。

その頃、ロウリア王国首都 ジン・ハーク ハーク城。

6年もの歳月をかけ、ようやく実現したロデニウス大陸を統一するための軍隊、錬度も列強式兵隊教育により上げてきた。

資材も国力のギリギリまで投じ、数十年先まで借金をしてようやく作った軍、念には念を入れ、石橋を叩いて渡るかのごとく軍事力に差をつけた。

圧倒的勝利で勝つはずだった。

だが、アデイウム帝国の宣戦布告により、保有している軍事力のほとんどを失った。

あのとき、アデイウム帝国の使者を、丁重に扱えば良かった。もつとあの国を調べておくべきだった。

ワイバーンのいない蛮国？

ワイバーンの代わりに最も悍ましいものを使役する異能力者の集まりだ。

軍のほとんどは肉の怪物に飲まれた。船団も殆どが壊滅した。国民の5割は怪物と同化した。

こちらの軍は壊滅的被害を受けているのに、アデイウム帝国はほとんど国力を高め、戦う度に軍勢は成長していると言う有り様だ。

もしかしたら列強国を相手にしても、アデイウム帝国は勝利するかもしれない。

敵は、首都の近くまで来ている。

もう、どうしようもない……。

ハルコストと化した元国民の群れに首都の辺りは完全に包囲されている。

なんとか、水際でハルコストの進軍を止めることには成功しているが、それも長くは持たないだろう。

唯一の救いは火が有効的であると判明した事くらいだ。とは言っても焼き石に水でしか無い。

その時だった。

巨大な何が迫ってくる地鳴り、そして肉を貪り食う咀嚼音、それと同時に近衛兵の悲鳴が響き渡った。

それから、間も無くして王の謁見の間に、1人の女が入ってくる。両脇には全身をキチン質で覆われた人型の怪物が居た。その背後には無数の、尚且つ多種多様なハルコストが列を成していた。

女は武器らしい武器は持っていない。俗に言う肉操作魔術師^{カルノマンサー}だろう。

王の脳裏に、古の魔法帝国軍、魔帝軍のおとぎ話が浮かぶが、全く別のベクトルの悍ましい存在であると認識する。

「ま、まさか魔帝軍か……！！？ いや、なんだ、なんなんだ！！？」
ハーク・ロウリアは恐怖に慄き、尋ねる。
女は王に迫る。

「魔帝軍というのは、よく解りませんが……。私はカルキスト・ハリーナ・イエヴァ……降伏勧告に来たものです」

「降伏勧告だと…?」

「はい、もう勝ち目がない事は分かった筈です。ならばこれ以上被害が広がるのは嫌でしょう?」

それは願ってもない事だが、何を要求されるのか、それがひたすらに怖かった。

「その降伏の対価は?」

「温存している全てのワイバーンの引き渡しと、国土の7割の割譲です、それ以外には特には求めません。まあ本国としては求めるものは大半は手に入りましたし…。」

カルキスト・ハリーナ・イエヴァは自身のハルコストに目を向ける。やはり、自分のハルコストに、魂が加わっていく様は気分がいいものだ。

ハリーナ・イエヴァは邪悪な笑みが一瞬、浮かぶがこれは行かないと即座に思い、表情を引き締める。

「それでどうしますか? これを受け入れるか、滅ぶか」

「分かった…。条件を飲もう、これ以上の虐殺を辞めてくれるなら構わない」

こうして、ロウリア王国はアデイウム帝国に降伏した。

ネオ・サーカイト召喚

「うぐぐつ……ここは何処だ？」

異形の姿の……強いて言うならグレイ型宇宙人の様な姿をした
元人間は辺りを見渡し、呟いた。

SCP—2480—1として收容されていたカルキスト・カルバ
シュの此処に来る前の最後の記憶は財団の收容施設で拘束され、イン
タビューを受けていた所までだ。

辺りを見渡したのだが、そこは辺り一面が森で此処が何処なのか全
く記憶に無い。

「財団から解放されたのは良いが……」

カルバシュは溜息を吐いた。

此処は地球なのか、異世界なのか、過去なのか、未来なのか、何故
收容施設外に出れたのか検討が付かない。

とりあえず、喜ぶべきなのだろうか……。

「我らの父、イオンが助けてくださいだったので……そう言うこ
とにした方が気分も良いし、そうしよう」

カルバシュは自分の中で自己解決する。

「お前もナルカか？」

「誰だ？」

カルバシュが後ろを振り向くと、そこにはアジア系の男性の姿が
あった。

彼の背後には無数のハルコスト蠢いていた。彼の腕は赤く染まり、
この場でハルコストを生成したのだろう。

「俺はカルキスト・ヴアルザスクだ」

男はそう名乗った。

ヴアルザスクは財団の機動部隊の襲撃に遭い、異空間へ逃亡を測ったのだが、辿り着いた世界が此処だったと言う訳だ。

勿論、帰る手段も無いので、とりあえず自分の手先を増やしていた時にナルカらしい、異形の男へと出会ったのだ。

「私はカルキスト・カルバシユだ…… 同胞よ、此処が何処なのか知っているか？」

「此処は地球では無いのは確かだな」

「そうか……」

ヴアルザスクはカルバシユはこれまでの経緯と、お互いの持つ情報を交換した。

「つまり、そのハルコストは近くの村の人間を変貌させたと…… そして財団やメカニトもこの世界には居ないと来た……」

カルバシユは口角が異常な程まで曲がる。普通の人間だったら、千切れてしまう程だ。

「欲望は万物の尺度である。道德の鎖に縛られるなけれ。望む事を、望む相手に成すが良いっ!!? 正しくこの教義を実行するに適した世界ではないか!!? 良い、実にいいぞ!!?」

カルバシユの邪悪な笑い声が辺りに響きた渡る。

「しかし、それに代わる団体はあるかも知れんから、注意は必要だな。しかし、文明レベルは低い様だが……」

ヴァルザスクが襲った村は中世レベルの生活をしていた。恐らくこの世界はその程度の文明レベルなのだろう。ヴァルザスクの脳内には日本で流行っていた異世界転生モノが浮かんだ。

その時だった。

目の前から更に二人の人物が此方に歩み寄ってきた。そのうち一人は異形頭の男で、彼がナルカだと瞬時に分かった。

カルバシユは、その異形頭の男に見覚えがあった。

彼はコーネリアス・P・ポドフェル3世——通称カルキスト・スルキスクだ。彼と直接的な面識は無いが、彼の放棄したポドフェル邸を中心に財団の機動部隊相手に対抗したのだ。

そう言う事もあってか、少しだけ親近感を覚えていた。しかし、もう一人は見覚えは無いのだが。

「我はカルキスト・スルキスク……その気配からして貴方達もナルカだろうか？」

「私はカルキスト・イアヘルと言う」

「これは良い冗談だな、こんな辺鄙な異世界にカルキストが4人も集結したんだからな」

カルキスト・ヴァルザスクはそう言い放った。

こうして、四人の立ちの悪いカルキスト達は異世界の地にて集結した。ここまで都合良く人が揃っているのだから、他の同胞達も来ているの可能性があるため、ヴァルザスクはハルコスト辺りを偵察する様に命じた。

しかし、ヴァルザスクの予想は外れ、ナルカらしき人物は見当たらなかった。しかし、代わりに近くに人間の街らしき物を確認した。

この時はまだ、トールパ王国に魔物以外の脅威が迫っているのは誰も

気付いていなかった。

ネオ・サーカイト召喚―2

トール王国 王都 ベルンゲン

中世のヨーロッパのような城と静かな城下町、悪く言えば田舎の王国であり、良く言えば趣のある王都ベルンゲン。

町を行きかう人々は、人族もいれば、獣人族、エフルなどで3人のカルキストにとっては新鮮な光景だった。

「にしても本当に異世界なんだな……」

行き交う人々を横目にカルキスト・ヴァルザスクは呟いた。

日本人(?)である彼にとっては、何処かで見たことあるような光景だった。

他の2人であるイアヘルとスルキスクも興味深そうに辺りを見渡している。スルキスクの異形の頭は肉操作魔術で本来の人間の顔に戻っていた。

ちなみに、カルバシユに関しては姿形が完全なる異形の為、近くの森でハルコストと共に留守番することになった。

「にしても、古臭い街だな…… 財団やメカニトが居ない分マシだが」

スルキスクはそう呟いた。

「なんか俺達目立ってないか?」

イアヘルはそう言って辺りを見渡した。

確かに、イアヘルとスルキスクは宗教的な文様があしらわれたローブを着ている。

はたから見れば、怪しい宗教団体、若しく危ない魔術師集団と思わ

れてるかも知れない。

もつとも間違いは無いのだが。

そもそも、ヴァルザスクに関しては、ジープンを履いているのだ。この世界にジープンは存在して居なそうなのでかなり目立っている気がする。

ちなみに、ジープンを履いたヴァルザスクが空間転移に失敗し、下半身からハンケツを覗かせている姿は別の世界では有名だったりする。

四人のカルキスト達は这个世界への情報を集める為、近くの酒場までやってきた。

段々、夕刻という事もあり、酒場はそれなりに賑わっていた。

酒場は何処か暗い雰囲気、酒を飲んでいる者達の表情も良いものとは言えない。

「魔物の群れが近隣まで近づいてきているらしいぞ」

「おいおい、それってマジかよ☒ 逃げた法が良いんじゃないか☒」

「逃げるったって何処にだよ、噂じゃ既にベルンゲンは包囲されているらしいぞ」

ヴァルザスクはこの世界には、魔物もいるのかと感心に思う。

王道な剣と魔法の世界なのだろうか。それにしてもかなりひっ迫した状況らしい。

「大変だ！」

その時、1人の男が焦った様子で酒場へと入ってきた。

「王都に、魔物が攻め込んできたぞ！」

酒場に動揺が走ったのがカルキスト達は理解した。

「見た事もない魔物に、灰色の肌をした異形の人間が先頭に居たそう
だ」

「なんだそれ？ 聞いた事ないな」

彼らがカルキスト・カルバシユが暴走したと気付くのは少し先である。

ぬ

日本国召還 外伝1

時を少し戻す。

クワトイネ公国 外務局――

数多くの国とのやりとりを行うこの場所は、現在、新たに現れた新興国家、日本国と国交を開くための事前準備のため、使節団派遣の事前準備を進めていた。

「ヤゴウ！日本とかいう新興国家に使節団の1人として行くらしいじゃないか！うらやましいいな。俺も行ってみたいよ。」

同僚の1人が話しかけてくる。使節団派遣は、珍しいことではない。数多の国が存在するこの世界では、国の主権者が入れ替わり、国名が変わることは珍しい事ではなく、中程度の国家では良くあること。

さらに、大国家が分裂して中小国になることも珍しくはない。

ただ……。

治安が悪いことが多く、使節団に被害者が出ることも珍しくは無く、使節団派遣の任務にあたることは、皆が嫌がる仕事であった。

さらに、クワトイネ公国のあるロデニウス大陸は、第3文明圏の影響を多少は受けているため、文明圏からは「蛮地」と馬鹿にされるが、「蛮地」と蔑まれる中では、かなり上位の生活レベルを維持し、食事に關しては、文明圏に負けないほどの良い食事をしている。

使節団派遣となる対象地域は、クワトイネ公国よりも生活水準が極端に下がる場合も多く、衛生面でも問題があり、疫病に感染する使節団も多く、治安も悪いことがほとんどである。

しかし、今回の使節団が派遣される対象となる国は、色々と注目を浴びている。

派遣される使節団に配布された事前資料に目を通すと、にわかには信じられない事が記載してある。

事の始まりは、中央歴1639年1月24日の朝、わが国の第六飛龍隊の騎士、マールパティマが、公国北東方面の海上を警戒飛行中に、

金属で出来ていると思われる飛龍を発見、しかし、全く追いつけずに引き離されたという。

さらに、その鉄龍を迎撃するために出撃した第六飛龍隊は、ワイバーンの武器、導力火炎弾の射程に捕らえる事無く引き離されたという。

報告書では、全く信じられない事に、時速600kmを超えていたとある。

しかも、相手はこちらよりも遥かに大きいにも関わらず。

さらに、最初の海からの接触は、230mクラスという、想像できないほどの金属製の帆が無い巨大船で来たという。

「信じられないな……。」

ヤゴウは思考を巡らす。

ワイバーンといえば、高価な兵器であり、竜騎士はエリート中のエリート、兵なら誰しも一度は憧れる空の覇者である。

歩兵よりは騎馬隊の騎士が格上であり、騎士よりも竜騎士は圧倒的に格上、ワイバーン1騎で1個騎士団を翻弄できる。

時速230kmクラスの高速で飛翔し、弓の届かない高空から、ワイバーン自身の人間とは隔絶した魔力によって放たれる導力火炎弾は、人間の作り出した武器とは比較にならない威力を有し、さらに、硬い鱗は弓をも跳ね返し、対人用の刃物を通さないほど強靱である。

ワイバーンよりも強力な生物といえば、三大文明圏で少数作られているといわれる、ワイバーンロードくらいしか思い浮かばない。

いや、人間が制御できない存在であれば、各種属性龍や、古龍、神龍がいるが、人間が扱うのは、夢のまた夢、天災のような存在だ。

そんなワイバーンを超える「物」を実用化し、しかも異常に大きい飛行物を飛ばすなんて、第2文明圏のムーでも無理ではなからうか。

信じられないが、日本の飛行物が経済都市マイハーク上空に達したのは事実であり、彼は日本という国に非常に興味を持ち始めていた。(今回の使節団の派遣……。私は歴史に名を刻むかもしれない……。)

「これより会議を始める」

不意に、彼の思考は号令により中断させられた。

小さな会議室で、使節団の団長が説明を始める。今回派遣される使節団は5人、全て外務局の肩書きがあるが、軍務局の將軍ハンキも外務局への出向という形で、使節団に入っている。

団長が話し始める。

「今回の我々の一番の目的は、日本が我が国の脅威となるかを判断する事にある。知つてのとおり、我が国の防空網が日本の鉄龍によつてあつさりと破られた。

今のところ、我が国に鉄龍を防ぐ手段は無い。

現在日本は我が国と国交を結びたいとの意思を示しているが、何を考えているのか解らないというのが正直なところである。

覇権国家なのか、もしくはロウリアのように亜人に対して極端な差別意識を持つているのか、何のために我が国と国交を結ぼうとしているのか、真意を調査する必要がある。」

皆が頷く

「日本がどの程度の国なのかは不明だが、技術の高い軍事力を持っていると思われる。理解しているとは思いますが、毅然とした態度で接することも必要だが、相手を刺激しないように、言動には十分配慮すること。」

あと1点、日本は何が強く何が弱いのかを調べ、我々が彼らに対して優位に立てる部分を探してほしい。

それでは、皆に配布されたレジユメを見てほしい」

新たに配布された資料に目をとおす。

使節団の片眉毛がつりあがる。

・・・国ごと転移??

説明が始まる。

「驚いたと思うが、彼らの言い分によれば、国家ごと突然この世界に飛ばされたと言っているようだ。真意はなんともいえない」

たしかにそうだ。日本の主張する国土のある位置は、群島はあれど、海流や風が乱れる海域であり、かつては無人だった。

いきなり新興国家が出来上がったとしても、突然の高度文明が育つとは思えない。

国ごとの転移か・・・まるで、ムーの神話みたいだ。

第2文明圏の列強国、ムーには、1万2千年前に「大陸大転移」が起きたといわれる神話が残っている。

正式な当時の政府記録として残っており、ムーの人々は信じているが、他の文明圏の人々は、ただの御伽噺として認識していた。

「日本側の説明によれば、レジュメのとおり、今回は日本が移動手段と船舶を提供する。

出発は1週間後の昼、みな準備をしつかりしておくこと。

そして、出発から2日後の夕方には日本の西側に位置する都市、福岡市に上陸し、宿で3泊する。福岡市の宿で、日本で行動する上での常識を教えこまれる。日本の外務省によれば、日本の常識を知らずに勝手に外出すると、車と呼ばれる馬車のようなものに、踏まれて死んでしまう可能性があるらしい。

上陸から5日後の昼には、福岡市を出発、新幹線と呼ばれる輸送システムで、その日の夕方には日本の首都東京に付き、翌日日本政府の人間と会談が行われる」

・・・・・・？

おかしい、時系列がおかしい。配布資料によれば、出発から2日後の夕方には日本の南に位置する島の地方都市にたどりつくところである。しかし、日本とクワトイネ公国は、1000km以上の距離がある。船でたった2日で到着する距離ではない。

さらに、福岡市から東京都までの距離も、1000kmを軽く超えているにもかかわらず、昼に出て夕方に付くとはどういった事だろうか。

我が国の上空に現れた鉄龍ならば話は解るが、新幹線は、地上を走る乗り物であると、配布資料にはある。

どうやら、我々の常識が通用しない国のようなのである。

会議は終わった。

1週間後――

使節団の面々は、クワトイネ公国で一番大きいマイハーク港に集まっていた。

雲は高く、きれいな青空が広がり、少し涼しい。

スーツを着た男性が話し始める。

「お集まりの皆様、本日は、日本へ使節団としてきていただけたことでの事で、喜びの極みです。私は、皆様の今回の派遣を少しでも快適にお過ごしいただくため派遣された、日本国外務省の田上です。

いわゆるお世話役になります。

不便な点があれば、どうぞお申し付け下さい。」

そんな中、1人憂鬱な顔をした使節団員が1名

「今から船旅か……。」

「ハンキ將軍、顔色が優れません、どうされましたか？」

「ヤゴウ殿、今は外務局出向の身、將軍はやめてくれたまえ」

「解りました。では、ハンキ様、どうされたんですか？」

「いや、今から船旅と思うと、気が重くてな……。船旅は良いものではないぞ。いつ転覆するかも解らないし、船の中は光が行き届かないので、暗く、湿気が多く、臭い。しかも、長旅になると疫病にかかるとも多く、食べ者が腐らないための保存食しかないので、塩辛いものしか食べられない。

何よりも水の確保が非常に大変じゃ。喉が渴いても節約節約、まあ、今回は日本が2日で着くと言っているとの事なので、我慢は短くて住むが、正直2日というのは、外務局と日本国で、何らかのやり取りのミスがあったとわしは思っておるよ。

ありえない速度でいかないと、無理じゃ。」

「私も、時系列がおかしいと思っています。ただ、鉄龍を飛ばした日本であるので、もしかすると我々の常識では図ってはいけないのかもしれない」

「聞もなく時間になる。」

「島の影から、島のように大きい白い船が、現れる。」

「!!!!!!」

「!!!!!!」

「!!!!!!」

「!!!!!!」

田上が説明を始める。

「今回は、あの沖合に停船中の船に乗って、日本国は向かいます。本当は、この港に直接接岸したかったのですが、残念ながら、港の水深が不足しているため、あそこに停船しました。皆様には、小船に乗って、移っていただきます」

やがて、その船から、小船が3隻現れ、これまた信じられない速度で港に向かって爆走してきた。

その船にも、帆は無かった。

「田上殿、田上殿」

ハンキが呼びかける。

「はい、なんででしょうか？」

「あの……。あの船は、見たところ帆が無いようであるが、どうやって動いているのじゃ？小船に関しても、オールが無いようじゃが、どうやったらあんな速度で走れるのじゃ？ま、まさか、第一文明圏の魔導船みたいな物か？」

「第一文明圏の魔導船というのが、どういふものか存じ上げませんが、船はディーゼル機関によって動いています」

「でいーぜるきかん？」

「はい、いわゆるカラクリです。重油を爆発させることによって、そのエネルギーを吸収し、スクリューを回すことによって、推進しています」

「うーむ、良く解らないが、すごいふう。」

やがて、皆は小船に分乗し、大型客船に向かった。

大型客船に乗船する。

客船内部に入ると、皆が驚く、

明るい。光の精霊でも飼っているのだろうか。

「……この船、鉄で出来ている、いったいどうやって浮いているのだ……。しかも中が明るいし、広い。」

各々に割り当てられた部屋へ案内され、一堂はくつろぎのひと時を過ごした。

その日のヤゴウの日記より

なんとという事だろうか、私は驚きを隠せない。このような大きな船は、見た事が無いし、聞いたことも、文献で読んだ事もない。

しかも、中は快適で、明るく、信じられない事に、温度が一定に保たれている。

このような大きな船にも関わらず、海上を矢のような速度で進んでいく。

このような物を作り出してしまいう国、日本とは、いったいどのような国なのであろうか、

外務局の中には、新興国家の蛮国に違いないと言う者もいたが、いまのところ、言いたくはないし、認めたくもないが、彼らから我々は、蛮族に写っているのではないだろうか。

もしかしたら、日本は文明圏の列強国に匹敵する力を持っているのかもしれない。

2日後――

「皆様、福岡市が見えてまいりました。福岡市は、九州地方、中国四国地方の中で、最大の都市になります。あそこに見えるのが博多港であり、博多港からは、リムジンバスで、ホテル新日航まで移動していただき、日本についての基礎知識を学んでいただきます。」

博多港が見えてきた。高層建築物が立ち並び、都市高速が走っている。

やがて、リムジンバスに乗り、ホテル新日航へ移動する。

船の上で、田上から、車と呼ばれるものが、内燃機関によって動いているということを知ることができたが、まさかこんなに量が多いとは思わなかった。

話を聞くと、国民1世帯1台は、ほぼ車を持っており、20代そこそこの日雇い労働者であってもグレードの差はあれ、車を購入する事が出来るという。

呆れるほどの豊かさ。

ホテルにおいて、日本の基礎知識を学ぶ。信号システム、自動販売機、自動改札機、鉄道システム、そして、拾ったものを、そのまま自分の者にすると、占有離脱物横領という罪に問われること。

彼らの説明によると、色々不思議なように見えるが、これは科学であり、仕組みが理解できれば誰も作れると言っている。

なるほど、信号というのが無いと、あの車たちが好き勝手動いたら、車は動かなくなるだろう。

「田上殿、田上殿」

ハンキが話しかける。

「何でしょうか？ハンキ様」

「ここは、ずいぶん発展しているようだが、首都はまだ発展しているのかね？」

「はい、まず人口が比較になりませんので、高層建築物はここよりも高いものになります。地下鉄も、数路線ではなく、網の目のように広がっています。

広い範囲で都心部が広がった状態ですね。お恥ずかしいことですが、町並みは、福岡市の方が綺麗です。福岡市から東京に来た方は、いつも雑多な感じがして汚いと言われますので……。」

「うーむ……。田上殿、日本軍を見学したいのじやが、無理じやろうか？」

「我が国は、軍を置いておりません。それに変わる自衛隊というものがあります……。そうですね、少々お待ち下さい。」

田上が、光る小さな板のような物を出し、独り言を言い始める。通信用魔法具のようなものだろうか、異常に小さいが……。

「ハンキ様、ちょうど明日、航空自衛隊築城基地で航空祭が開催されます。一般市民向けの自衛隊と市民の交流会のようなものですが、それでよければ手配できますが。」

「おお、すまんもう、たのむ、たのむ」

ハンキは、日本軍見学の機会を得て、上機嫌であった。

「他に築城基地航空祭に行きたい方はおられますか？来賓席を手配いたしますが。」

「私も行きます」

ヤゴウが手を上げ、結局翌日は、ハンキとヤゴウで航空祭へ行くこととなる。

翌日――

ハンキとヤゴウは、築城基地航空祭の来賓席にいた。

(正直、高速道路では、目を回しそうになったが、やっと鉄龍基地で、龍たちのデモンストレーションが見られる)

やがて、航空祭が開催される。

一般市民が基地の中へ入場し、軍と触れ合うなど、クワトイネ公国の常識からすれば、信じられないことであり、基地へ入場する人の多さを見るに、この国の軍が人々に愛されていると思いはじめハンキであつた。

「ただいまより、F-15の機動飛行が行われます。右側の空をご覧下さい。F-15が時速850kmで進入してまいりました」

!!!!

「田上殿!今850kmといったか?聞き間違えではないか?」

ハンキが興奮して話しかける。

「はい、時速850kmとアナウンスしていました」

右を見る。

無音で、飛行物は、近づいてきた。来賓席に、近づいた時、ようやく音が聞こえ始める。

「音速に近い!!!」

ハンキが吼える。

ゴオオオオオオオオオ

F-15は垂直に近いのではないかと思うほどの上昇を始める。主翼上部には一部剥離した空気が白い雲を作り、翼端では、主翼下部から上部へ回り込む空気により、白い航跡を引く。

雷鳴のような轟きがあたりを包み、エンジンの後ろからは、赤い炎が二つ見える。アフターバーナーの点火。

その飛行機は、短時間のうちに、青空に消えていった。

「.....」

ハンキは絶句している。

「左の空をご覧下さい。先ほどのF-15が戻ってまいりました」

「え!?!もうっ?」

「F-15は時速600kmほどで侵入し、皆様の前で旋廻します。この間、パイロットは旋回中、大きなGがかかります」

F-15は客席前で大きく旋廻する。

「これほどの機動が可能なのか・・・。」

そのまま上昇

「あの体制から、これほどの上昇力があるのか」

様々な飛行機が乱舞し、ブルーインパルスの曲技飛行を持って、航空祭の終わりを迎える。

「なあ、田上殿、あの鉄龍は、とてつもなく早い、いつたいどのくらいの速度が出るのじゃ？」

「F-15は、我が国の主力戦闘機であり、速度はマッハ2.5ほど出ます。音速の2.5倍ですね。音速を超えると衝撃波がでるため、今日の飛行は、時速850kmくらいに押さえていたみたいですが」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

その日のハンキの日記より

町にあふれる建築物、そして巨大な上空道路、鉄道と呼ばれる大規模流通システム。

これらの凄まじいまでの建造物群を作る日本という国が私は恐ろしい。

しかも、ここは、日本の首都ではなく、一地方都市に過ぎないという事実。驚愕よりも上の驚きを表す言葉がほしくらいである。

豊か過ぎる国日本、彼らはその強力な国力にふさわしい、凄まじいまでの軍事技術を有している。

戦闘用の鉄龍は、音の速さの2.5倍で飛行し、上昇力もとてつもない。

戦闘行動半径は、1000kmを超えるという化け物だ。

彼らから見れば、我が国のワイバーンは、止まっている的に見えることだろう。

案内役の田上に聴取したところ、鉄龍は海上攻撃や、陸上攻撃の支援にも使用可能だそうだ。

マイハークに進入した鉄龍には脅威を感じたが、彼らの実力はそん

なものではない。

戦闘用鉄龍であれば、マイハークに進入した鉄龍は、すぐに落とせる。つまり、彼らのマイハークへの侵入は、本当に哨戒活動であったと推測できる。

彼らとは友好関係を構築しなければならない。

彼らを敵にまわすということは、文明圏の列強国を敵にまわすよりも恐ろしい事である。

彼らと敵対してはならない。

ホテルにて、

「なあ、ヤゴウ殿」

「なんでしょか」

「日本をどう思う」

「そうですね、一言で表すなら、豊かですね。あきれるほどに・・・ホテルの中は、温度が一定に保たれている。これほどの建物を暖めるのに、どれほどのエネルギーがいるのか・・・しかも、外国の使節団が来るからここだけ特別に暖かくしている訳ではなく、ここに現存するほぼ全ての建物が空気を調節されている。

捨るだけで、お湯が出る機械もある。一々火を起ささなくても暖かいお湯に浸かれる。トイレも非常に清潔に保たれている。

外に出ると、無人の販売機械があり、冷えたジュースや、場所によつては酒まで手に入る。

夜間開いている店舗でいつでも上質な物が手に入る。

食品売り場では、常に新鮮な食料が手に入る。

夜も明るいので、街中なら明かりが無くても歩けるし、治安がとつともなく良い。

全ての生活レベルが、我が国と比べ、次元が違う。悔しいが、国力の違いを感じます。

そして、航空際には正直驚きました。

圧倒的な力の差を見せ付けられた思いです。

日本は敵にまわしてはいけないと思いました。」

「やはり同じ思いか・・・あの戦闘型の鉄龍の前には、ワイバーン

の空中戦術は役にたたないだろうと私も思う。明日は首都に出発
じやな。日本は心臓に悪いよ」

「私はワクワクしていますよ。このような国が、近くに突然現れ、し
かも自分たち以外を見下しきっている文明圏よりも高度な文明を
もっている。その最初の接触国が我が国とは……。彼らに覇を唱え
る性質がなければ、これは幸運です」

ヤゴウとハンキは、深夜まで語り続けた。

翌日――

涼しい朝、雲は高く、空気は澄んでおり、遠くまで良く見える。

快晴――

中国から飛んで来ていた大気汚染物質PM2.5の影響も無く、日
本の空気は連日澄ん
で見える。

スーツ姿の男が1人、使節団の前に現れる。

「みなさん、おはようございます。昨日は良く眠れましたか？」

田上が集まった使節団に話しかける。

「本日は、朝食の後、午前10時00分から東京での行事について説明
があり、11時

30分にホテルを出発、12時00分に博多発東京行きの新幹線に
乗車してもらいます。

17時04分には東京駅へ付きますその後は……」

説明が続く

日本に来て思う事は、時を刻む概念がはっきりしている事だ。

腕時計と呼ばれる精密な機戒が使節団に配られている。

秒単位で時を刻む事ができ、それが簡単に持ち運び出来るというこ
とは、軍において、

時差の無い一斉攻撃が可能ということだ。

軍の効果的運用という意味合いにおいて、これは凄まじい事であ
る。

さらに驚くべきことは、今配られた時計は「でんぱそーらーおつ
ち」と言うらしいが、

これは光ある限り動き続け、誤差は10万年に1秒しか無いという。

なんと形容していいのか解らない。

「田上殿、博多と東京は、1000km以上離れていると聞いていたが・・・。」

「はい、そうですが」

「今日乗る新幹線と言われる乗り物は、速度の出る地上を走る乗り物という説明は聞いて

います」

ヤゴウは話を続ける。

「17時04分着というのとはなんですか？そんなに、分まで正確に着くのですか？」

「はい、災害や事故が無ければ、時間どおりに着きます」

「・・・どうやら、本当に我々の知識で日本を凶ろうとしてはいけないらしい

「解りました。ありがとうございます」

「いいえ」

田上は、満面の笑みで笑いかける。

キーーーーーっつっドン!!!!

物と物が大きくぶつかはる音、いったい何が起きたのだろうか。

ヤゴウは外を見る。!!!!

頭から血を流して座り込んでいる女性が1名、その横に黄色に塗られた変な車が止まっている。

「またタクシーによる事故か」

田上ははき捨てるように言う。

福岡市の事故の半分とも言われるタクシーによる事故が起きた瞬間だった。

事故にあった女性は、力無くうなだれている。

「まずい！早く治療せねば!!!」

ヤゴウは駆け出そうとする。

「お待ち下さい、ヤゴウ殿、すぐに救急車がまいりますので、大丈夫で

す」

ヤゴウは田上の制止を振り切り、ホテルを飛び出し、座り込んでいた女性へ駆け寄る。

田上は、立場上外国の使節団にけが人の手当てをさせるわけにはいかなかった。

女性はうなだれており、頭に開いた傷口からは、脈打つたびに、激しく出血していた。

「いかな．．．：v m t a i b a, e o.; b, a; w s o e 4 i g a m o i s e o」

「!!ヤゴウは何かを唱え始め、両手が淡い光を放つ。

「!!き．．．傷口が!!」

「!!女性の頭の傷が、みるみるうちに塞がっていく。

周囲には人だかりが出来ていた。

「す．．．すごい!!見た!?今の」

「見た!!あの人が何かを唱えたら、傷が塞がっていった!!」

「し．．．信じられない。まるで魔法みたいだ!!」

誰かが叫ぶ。

「?魔法ですが、何が珍しいのですか?」

オオオオオオオオオオオオオオオオオオ

何気なく答えた言葉に、周囲が沸き立つ。きよんとするヤゴウ。

周囲は喧騒に包まれた。

新幹線の中にて

「いやはや、驚きました。資料には書いてありましたが、実際に魔法を見る事が出来るとは．．．。いやはや、すばらしい」

田上がほめちぎる。

「日本では、回復系の魔法は珍しいのですか?」

ヤゴウは、褒められて悪い気はしなかった。今までは驚いてばかりだったが、初めて日本人を驚かすことが出来、内心少し自慢してやりたい気分になっていた。

「いえ、回復系もなにも、魔法そのものが日本にはありませんから」

「え!!!!!!」

田上[!]の何気ない一言に、使節団の一同は口をそろえて驚く。

「し・しかし、あの飛行機と地上のやりとりは、通信魔法でなければ、なんなのですか?」

ハンキが問う

「あれは電波を使用しています。．．．何と申しますか、前にも一度ご説明申し上げたかもしれませんが、日本の発展は、すべて科学によるものです」

「全てかがく?」

「はい、日本は物理．．．物の理ことわりをとことん追求しています。これにより、作られた物により、日本は国を維持しています」

使節団にとって、国家機密級の発言をさらっと言われた瞬間だった。

日本に魔法が無いのなら、我が国の魔法技術を良い条件で輸出できる。

例えば、簡易式の外科を開設し、小さな傷や肩こりを治すことも出来るし、今回のような事故による救急外来でも需要はあるだろう。

一時的な傷の回復は、魔法が相当効果的だ。

また、魔法学校を開設して、授業料をとることも出来るだろう。

クワトイネ公国を発展させる上で、日本が科学のみに頼っているのは重要な発見だった。

戦闘に使えるほどの個人の魔導士を大量にそろえるのは、そもそも素質の問題があり、魔法技術、人的資源がものをいうが、日本の言う「科学」で、理を知っていれば作ることが出来るのなら、我々にもある程度の模倣ができる。つまり、「国力」の基本値を上げることが出来る。

「田上殿、物のことわり、物理を技術輸出してくれることは、可能だろうか?」

「我が国には最近、新世界技術流出防止法という法律が出来ました。中核的な技術の輸出は禁止されていますので、難しいとは思いますが、物理だけなら、そのへんの本屋で売っています。ただ、翻訳作業

が全く進んでいないので、あなた方の言葉に翻訳するのは、難しいと思います」

この世界は、不可解なことが多く、言葉に関しても、言葉は通じるのに、文字にすると全く違う言語、文法になる。日本はこの世界に転移して間が無く、又、現時点どの国とも使節団派遣のレベルであり、国交が無いため、翻訳作業は様々な分野で急ピッチに進められているものの、困難を極めていた。

ヤゴウは、物理、科学、化学の本をなるべく多く持ち帰る事を心に決めた。

新幹線は順調に走行していた。

「ハンキ様、それにしても、新幹線は速いですね」

「そうじゃな、これほどの速度で走っているのに、中はほとんど揺れず、快適そのものじゃ。しかし、これほどの速度で走るなら、事故が怖いのが」

「新幹線は創業以来、事故が原因の死者は無いらしいです。日本で最も安全な乗り物との事です」

「うーん、信じられんのが。そう聞いてもやっぱり不安じゃ」

そんなことを話しながら、新幹線は進んだ。

ヤゴウの日記より（一部抜粋）

いくつもの大都市を抜け、我々は新幹線により日本の首都、東京に着いた。

東京へ至る途中の地方都市でさえ、文明圏列強の首都をはるかに凌ぐ規模のものであったが、東京はまさに次元が違う。何もかもが正確に動き、人の量も多く、ビルの高さも天を貫かんとするものばかりである。

我が国の有名なエージェイ山（海拔高度539m）を凌ぐ建造物が現実に存在している。

私は、このような巨大な建造物郡を作り出す国力を持った国に、使節団として派遣され、明日実務者協議に挑む。

我が国の国益にかなうよう、最大限の努力をするつもりだ。

このような歴史的瞬間に立ち会えることは、幸いである。

翌日

日本、クワトイネ実務者会議
会議が始まった。

1人の痩せ型で、めがねをかけた男がクワトイネ使節団に向かって話しかける。

「農林水産省の日村です。単刀直入に申し上げますが、私たちは今、食料を欲しています。」

必要項目は……」

各種必要な食料項目が並べられているが、驚くべきはその量である。

「そ……総トン数年間あたり5500万トン!？」

「はい、貴国は農業の盛んな国と伺っております。食料自給率が100パーセントを圧倒的に超えているとも、さすがにこの数を貴国1国で輸出できるとは思っていませんが、このうちどれほどが可能か知りたいのです。もちろん即答は求めませんが、我々には時間があります。なるべく早いうちに知りたいというのが本音です」

資料を読んでいたヤゴウが話し始める。

「水産資源は、難しいですし、このコーヒー豆というのが良く解りませんが、それ以外なら輸出の量だけなら確保出来ると思います。もちろん国の許可はいりますが、ただ……」

「だた!？」

「これほどの量を貴国に運ぶ手段を我が国は持ちません。内陸に大穀倉地帯がありますが、そこから港へ運ぶほどのインフラはありません。もしも港に運べたとしても、そこで積載するための人員も不足しています。そして、何より船が無い」

「では、それを解決すれば、食料は輸出していただけと?？」

「本国への確認が必要ですが、可能かと思えます」

日本側の参加者たちがざわつく。

もしかしたら、いきなり日本の食糧危機を救える可能性が見え始めた。

ダンディな白髪にめがねをかけた男性が話し始める。

「外務省の前島です。クワトイネ公国さえ良ければ、港施設の増強とクワトイネ国内の穀倉地帯へのインフラ、鉄道整備は我が国が政府開発援助により資金を出し、我が国が整備いたしますが、いかがでしょうか？」

「クワトイネ使節団がざわつく。水と食糧はタダを言われるクワトイネ公国において、食料輸出により、国が潤い、さらに、港と鉄道のインフラ整備を日本が買ってしまった。」

これほどの好条件があるうか。

会議は良好に終了した。

10日後……

クワトイネ公国ならびに日本国における同意事項。

○ クワトイネ公国は、日本に必要な量の食料を輸出する。

○ 日本はクワトイネ公国のマイハーク港の拡充、マイハークから穀倉地帯へのインフラを、日本の資金により整備する。

○ 日本国及びクワトイネ公国は、国交樹立に向けた話し合いを継続する。

○ 為替レートを早急に整備する。

○ 日本はクワトイネ公国からの食糧一括購入の見返りとして、今後1年間はクワトイネ公国国内のインフラ（水道、電気、ガス）の整備を行う。

その後は、為替レートによる食料額に応じた対応を行う。

○ 日本、クワトイネ公国は、不可侵条約締結に向けた話し合いを継続する。

使節団にとっては、とてつもなく良い条件で、日本と良好な関係を構築することが出来た。

日本、クワトイネは、今後切っても切れない友好関係を築き、運命共同体となって、この世界の奔流に挑むこととなる。